る通りであろうが，この石炭鉱業は第1の下からの道が問題にならなかった産業部門なのであって，そうした産業部門を決定的に重要ならしめた産業構造の変化の過程が追求されねばならない。そのためには，1850年代の一層のたち入った分析が必要だと思われる。「新時代」の到来をつげる1853年には，エルバーフェルトの11人の繊維企業家を中心にグラードバッハ綿紡織株式会社が設立され，ケルンの金融業者を中心にケルン紡績株式会社が設立されて，繊維工業自体の中でも編成替が進行する。また，クルップがプロイセンに大砲を納入して死の商人に転化する1859年の直前には1857年恐慌が介在している。なお，著者のいう「東部への石炭販売と東部よりの穀物，とくにライ麦の供給という商品流通」は，推論の域を出ていない。ベルリン市場で角逐するのはイギリス炭とシュレージエン炭であってルール炭ではなかった。また，マンハイムの穀物取引所で取引される銘柄とそこでの価格決定のメカニズムを調べれば，東部の穀物が主役を演じていなかったことは明らかになるはずである。

以上，ともあれ，本書は，すぐれた課題設定のもとに，地帯構造論，2部門分割論，資本類型論，市場構造論等を重畳的に適用することによって，ラインラントとヴェストファーレンにおける産業資本の成立過程を分析しようとした最初のものである。そうした意味で，ドイツ経済史研究を専門とする以外の人々によっても読まれるべき書物である。　　**【大　月　誠】**

石　坂　昭　雄

『オランダ型貿易国家の経済構造』

未来社　1971. 11　397, 39ページ

比較経済史という観点からみて，オランダ史が独自の問題をはらむ極めて重要な研究分野をなしていることは，つとに大塚久雄教授によって指摘されてきたところである。だがそのような意義をもつものであるにもかかわらず，わが，国ではオランダ経済史に正面から取り組んでいる研究者は，残念ながらまことに少ない。そのため，近年いくつかの優れたモノグラフが現れているとはいえ，これをたとえば英，独，仏，米等に関する経済史研究と比べたばあい，その成果の数は寥々たるものといわざるをえないのである。オランダをヌキにして，およそ17・8世紀のヨーロッパ経済を語ることはできないといってもよい事情を想うとき，こうした現状は西洋近代経済史研究の上で，埋められるべき大きな空白を残しているといわなければならない。イギリス史の側からではあるが，この時期における国際経済的関連の形成過程にかねてから関心を抱いている者として，評者にはわけてもその感が深いのである。このようなときに，オランダ史の専門家の1人である石坂氏の労作が公刊されたことは，われわれ多年の渇望をいやすものといってよく，わが国西洋経済史学界における大きな収獲の1つとして喜びに堪えない。

本書は著者が1964年以来，学会誌に逐次発表してこられた4つの個別研究をこのたび新たに加筆・修正の上，1本に集成されたものであり，その篇別構成は次の4篇からなっている。やや長くなるが，内容の紹介も兼ねて掲げておこう。

I　オランダにおける農村工業の生成とその禁圧
　第1章　16世紀初頭におけるホラント伯領の経済構造
　第2章　1531年の「都市外諸営業制限令」の発布
　第3章　「都市外諸営業制限令」の成果とその施行をめぐる諸対立
　第4章　共和国期のホラント農村工業
　終　章　ホラントにおける農村工業禁圧の意義とその比較史的検討
II　17・8世紀におけるアムステルダム仲継市場の金融構造
　第1章　アムステルダム振替銀行(1609—1820)の意義
　第2章　アムステルダム金融市場の構造
　結　び
III　オランダ連邦共和国の租税構造＝政策
　序　　比較財政史より観たるオランダ
　第1章　租税体系の生成過程と租税構造
　第2章　17世紀における保護主義運動と消費税
　第3章　ピーター・ド・ラ・クールの租税論
　結　び
IV　オランダ型貿易国家の市民革命と財政制度の変革(1795—1830)
　第1章　オランダ仲継貿易の没落
　第2章　オランダにおける農村工業の生成
　第3章　オランダにおける市民革命と近代的財政制度創設の試み
　第4章　ネーデルラント王国(1815—30)の財政政策
　第5章　保護主義政策放棄の代価
　展　望

目次からも明らかなように，本書の対象は時期的にも

またその題目も，かなり広い範囲にわたっている。そうして本書を形づくる4つの篇は，それぞれ独立の論考としての体裁をなお残しつつも，相互に関連しあいながら全体として，いわゆる「オランダ型貿易国家」の経済構造の解明に捧げられているのである。このような構成をもつ本書のライト・モチーフについて，著者は「まえがき」で次のように述べている。「16世紀末葉，『彗星の如く』北欧の一角に興隆したオランダは，中世以来のヨーロッパ商業の遺産の継承の上に，史上最大かつ最後の仲継貿易国家を築き上げ，ヨーロッパのみならず，アジア，新大陸の天地に君臨した。このオランダこそは，ヨーロッパ経済史上の一つの極限形態——仲継商業資本の産業資本や封建的領主層に対する圧倒的優位をもって——をなし，資本主義形成の過程において，いずれの国にも姿を現わす対抗関係の一方の極たる仲継商業資本の利害を分析する上で一つの原型を提供するものである」。そして本書は，「かかる仲継商業の優位下におけるオランダ経済がいかなる構造＝内的編成を持つのか，また，そこでどのようなオランダ特有の利害対立が生ずるかを究明せんとしたもの」である，と。ここに表明されている著者の基本的視角は，本書全体を通じて一本の赤い糸のごとく貫かれており，その視角からする限りでは，著者が自らに課した課題は見事に達成されているといわなければならない。本文約400頁に及ぶこの書物を，その内容の詳細に即してひとつひとつ紹介することは，限られた紙幅ではとうてい不可能である。それにまた，上野喬氏による的確な要約的紹介もすでに現れているので[1]，ここではむしろ，本書のもつ2・3の特色とその問題点に絞ってコメントしたいと思う。

本書をひもとくとき，いやおうなしに読者に迫るものは著者の旺盛な史実追求力であろう。1960年頃からオランダ経済史に取り組まれて以来，著者はオランダ留学期間を含む10年ほどの間に史料をはじめとして海外の研究成果を飽くことなく渉猟され，尨大な史実収集の上に本書を完成された。著者の博覧と精励の一端は巻末に付された文献目録からも窺うことができよう。著者は何よりもまず博覧強記の経済史家である。著者のそうした資質は，たとえば，本書中の雄篇というべき第2篇において如何なく発揮されているといってよい。著者は振替や外国為替等の複雑な金融技術上の内容とメカニズムを解きほぐしつつ，金融史上の巨峰たるアムステルダム振替銀行の歴史的系譜，設立の経過，業務内容等々を逐一検討し，詳細な史実の上に立ってその全貌と歴史的意義を確定してゆく。そしてまた，この銀行を中核とするアムステルダム金融市場の構造も同様の手法を以て解析され，18世紀末の没落過程までが見届けられており，その追跡はほとんど余すところがない。アムステルダム振替銀行の機能と歴史的性格に関する著者の結論は，研究史上，以前から指摘されていたことを確認するものであるが，本書は同銀行を「近代的」銀行の嚆矢とする——しばしば繰り返し現われる——見解を，改めて実証的に封殺し去ったというべきであろう。

本書の半ばを越す分量を占める第3篇と第4篇は互いに対をなし，消費税を根幹とする特殊オランダ的な財政構造とその政策の変遷を論究したものである。このテーマは，わが国ではこれまで未開拓の領域に属しており，比較財政史の見地から克明に跡づけられた成果は，この分野における文字通りのパイオニア的労作となっている。この2篇は，市民革命期を間にはさむ共和国期からネーデルラント王国期に至る財政史として貴重な貢献であるばかりでなく，英，仏，独等における財政史の比較研究に豊かな示唆と素材を提供するものであるといわなければならない。ただ，対象が長期にわたっているためであろうか，博引傍証の史家たる著者の分析は，ここではクロノロジカルな史実の挙証に流れたきらいがあり，長大でやや単調な叙述は，通読に当って読者にいささか苦痛を強いるところなしとしない。

ところで本書に提出されている豊富な実証にもかかわらず，著者が使用されている理論的枠組は比較的簡明である。そしてそれは基本的には[2]，大塚教授によって設定された，貿易国家における対抗的な2つの型(「内部生長型」と「仲継貿易型」)という周知の類型構成であるといってよいであろう。著者はオランダこそそうした仲継貿易型の原型であるという観点を堅持しつつ，かかるものとしてのオラダ経済の構造をまことに丹念に解明された。だがまさにそのことから，本書を通読するとき，ここに描かれたオランダ像は仲継貿易資本の利害貫徹一色に塗りつぶされ，やや誇張していえば，著者の尨大な労苦は全巻をあげてかかる類型の詳細な確証に終始したかの印象を禁じえない。オランダではそもそもの初発から，内部

1)　『土地制度史学』56号(1972)。

2)　ここに「基本的には」と記したのは，著者にあってはオランダ型が一方では18世紀イギリスと，他方ではもう一つの型を示すプロイセンやフランスと比較され，封建的土地所有や前期的資本の一般的性格に解消しきれぬ前期的仲継貿易資本独自の最も保守的な性格が対比されているからである。本書232—8頁参照。

生長型の可能性が閉されていたとする第1篇「農村工業の生成とその禁圧」が巻頭にびしりと置かれていることは本書の基調を象徴するかのごとくであり，いっそうその感を深くするのである。評者の読み誤りでなければ，著者のかかる構造論的ともいうべきスタティックな把握は，オランダが「建国期ないし17世紀前半の混合型から数度の政治的騒乱を経て，イギリスとは対蹠的に，18世紀前半の中継貿易型に徹底していった[3]」とする大塚教授のふくらみのある特徴づけとは，かなりのへだたりをみせている。オランダ史において，内部生長型の産業構造を志向する客観的な可能性をどの時点まで，またどの程度まで語りうるかについて的確な判断を下す資格は，専門家でない評者には欠けている。評者の懸念はむしろ，もともと現実の歴史的特性を浮彫りにすべく抽象的レベルにおける引照基準として設定された筈の類型構成が，本書では仲継貿易型の貫徹を強調されるあまり，史実分析の過程でいつの間にか実体化されてしまってはいないかどうか，少なくともそうした著者の視角が事態の盾の半面を見落す傾きをもっているのではあるまいか，という点なのである。問題は実証の問題であるとともに，ヨリ根本的には歴史のダイナミックスをその中にはらまれている可能性において探るのか否かという，歴史研究の方法ないし発想にかかわる問題であるように思われてならない。

内部生長型の可能性如何の問題と関連することにもなるが，本書でライデン毛織物工業の展開が正面から扱われていないのは，まことに惜しいことである。同工業に関しては，すでに栗原福也，上野 喬，佐藤弘幸等の諸氏による優れた研究があり，また本書が，オランダ経済史の体系的再構成が意図されているわけではない」(まえがき)という事情があることも充分に了解しうるところである。にもかかわらず，同工業が少なくとも17世紀中葉までオランダ経済の繁栄に重要かつ決定的な生産的構成要素をなしており，オランダの「経済構造」を形づくる不可欠の一契機となっていたのであるから，その充全な解明と，とりわけオランダ産業構造の歴史的帰趨に対する意義を著者に質したいという望蜀の念を禁じえないのは，ひとり評者のみではあるまい。ただ，著者の同工業の意義に対する評価は，本書に散見される言及から推す限り，これまた上にふれた著者の視角の故であろうか，極めて消極的であるかに見受けられ，この点で佐藤弘幸氏の見解[4]とは著しく対蹠的である(もっとも，佐藤氏のばあいは逆に，同工業を共和国出現の基礎に直ちに結びつけるという，やや短絡的ゆき過ぎがあるように思われる)。ライデン毛織物工業の内的編成に多くの制約諸条件が重なりあっていたことは事実である。しかし，かつて評者もイギリスの側から言及したような——同工業にとっては不幸な——国際的インパクトを考慮におきつつ，同工業の帰趨をその原初の混沌が含む可能性において改めて吟味したばあい，果して著者の示唆するごとく，いわば必然論的な低い評価にとどまりうるものであるか否か。そしてそれはひいては，本書を貫いている著者の接近方法の再検討と著者の達成した実証的成果の再構成を促すところまで波及することにならないか否か。けだし，一般に内部生長型の産業構造を創り出してゆく起動力は，本書が究明している金融や財政ではなく，著者も同意されるように生産的基礎，とりわけ工業にこれを求めるほかはないのであるが，まさにこの起動力部門の論及が本書では間隙として残されている。そのことは本書全体の基調を制約することになってはいないであろうか。その意味で本書に本格的なライデン毛織物工業論が欠落していることは，単に本書がカヴァーする篇別構成上の技術的問題にとどまらぬ大きな意味をもつように思われるのである。

なお言及したいと思ういくつかの論点を残しているのであるが，すでに与えられた紙数を超過している。本書は著者が自ら認めておられるように「オランダ一国の経済構造の分析と国内の政策的対抗の解明に力点が置かれ，ヨーロッパ諸国民経済の絡合いとその中に占めるオランダの意義については」未展開に終っている。それ故，全体としてみたばあい，本書の分析は研究史上，従来の一国資本主義発達論的視角の枠内にとどまっているといわざるをえないであろう。だがそうした制約にもかかわらず，本書がそれ自体として極めて優れた労作であり，わが国学界に裨益するところ多大であることに変りはない。評者もまた，年来の学友である著者の高い学問的達成に心からの祝意と敬意を表するとともに，著者が，まさにヨーロッパ諸国民経済の絡みあいという拡大された視野のもとに，ネーデルラント史研究をさらに深化されることを祈ってやまないものである。

【船　山　栄　一】

3) 大塚久雄著作集，第6巻，201頁。

4) 佐藤弘幸「オランダ共和国の成立と毛織物業の展開」，『社会経済史学』36の4(1970)。

(『季刊　理論経済学』の目次紹介は82ページを，『農業経済研究』の目次紹介は34ページを，本誌投稿規程は21ページをご参照下さい。)